

ソーシャルワークにおけるreflection（省察）の 概念に関する一考察

日 和 恭 世

【要 旨】

ソーシャルワークが専門職としてのアカウンタビリティを果たすためには、ソーシャルワーカーが自身の実践を言語化することが求められる。しかし、実践の言語化はそれほど簡単なものではない。そこで、本稿では、専門職の専門性を明確にするために近年注目されている reflection の概念に焦点をあて、国内外の先行研究をレビューすることをとおして reflection とは何かを明らかにすることを試みた。

【キーワード】

reflection, reflective thinking, critical thinking

I. はじめに

ソーシャルワークは専門職として確立するために、これまで科学化を目指してきた。教育や研究、現場における研修など、ソーシャルワークが専門職であるための努力は様々な場所で行われているが、ソーシャルワークとは何か、という問いには未だに簡潔な答えを見いだせずにいる。このような中では、ソーシャルワーカーはこれまで以上に自らの実践を言葉にし、ソーシャルワーカーが関わることの意味を社会に示していくことが求められる。それは、言い換えれば、専門職としてのアカウンタビリティでもある。

しかしながら、実践を言葉にすることはそれほど簡単なものではない。なぜなら、実践においては、それぞれの実践者のもつ感覚や、実践者自身も意識していない暗黙知なるものが存在し (Polanyi =1980)、無意識のうちに行われていることも少なくないのではないかと考えられるからである。加えて、多くの実践者は日々の実践に追われ、自身の実践について考える時間を確保することが難しい状況にあると推察される。そのため、実践者がどのように考え、どのような判断をしているか等、実践者の思考の内実の多くは語られていないのではないかと考えられる。

このことに関して、Schön (1983) は、専門職としての専門性は実践者の実践的思考の様式にあるとし、そのような専門家像を“reflective practitioner”と呼んでいる (Schön 1983)。この理論は、実証主義の影響を受けた専門家像との対比のなかから見出されたものであり¹⁾、特に、ソーシャルワーク、教育、看護などマイナーな専門職であると称されてきた専門職の専門性を捉えなおす理論として注目されるようになった (佐藤 2001 : 5- 9)。

Schön の著書は、佐藤らによって翻訳され、日本においては教育や看護等を中心に様々な専門

職に影響を与えている。とりわけ、教育や看護においては、reflective practitioner になることが重視され、実践者の思考様式やそのプロセスを言語化する研究が行われている（佐藤ら 1990、1991；岩田ら 2005；山田ら 2008 ほか）。また、reflective practitioner の中心概念である reflection は、専門職教育において実践者の成長を促すための重要な概念であるとされ、reflection の概念を活用した教授法や学習方法の研究も行われている（田村ら 2002、2003；山口ら 2004、2006 ほか）。

わが国のソーシャルワークにおいては、reflection という用語にはあまりなじみがないが、自己覚知 (self-awareness) の重要性がしばしば指摘され、スーパービジョンや事例検討等、自身の実践について振り返る機会は今までも積極的に取り入れられてきた歴史がある²⁾。近年では、わが国でもソーシャルワーカーが reflective practitioner になることの重要性が指摘されることが増え（横山 2006；大谷 2012；空閑 2012）、Schön の専門家論をもとに、ソーシャルワーカーの援助観や経験知、実践知を言語化することでソーシャルワークの専門性を実証しようとする研究も行われている（横山 2008；齋藤 2008、2010、2011；大谷 2012）。しかしながら、欧米のソーシャルワークやわが国の他の専門職領域に比べると、reflective practitioner に関連する先行研究は決して多くはない。さらに、ソーシャルワーカーの思考の様式やプロセスに焦点を当てている研究はほとんど見当たらない。

もし、Schönが言うように専門職の専門性が実践者の思考にあるとするならば、ソーシャルワークとは何かとの問いに答えるためには、ソーシャルワーカーの実践における思考を言語化することができるような教育や研究を積み重ねていく必要があるのではないかと考える。そのためには、Schönの提示する専門家像やその背景となっている理論を十分に理解することが不可欠であろう。

そこで、本研究では、ソーシャルワーカーの実践における思考を言語化するための教育・研究を進めていくための前段階として、reflective practitioner の中核的概念である reflection に焦点をあて、reflection とは何かを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

本研究では、reflection をテーマとする先行研究を選定し、reflection の概念を整理した。先行研究の選定は、以下の手順で実施した。

(1) アメリカだけでなく、わが国における専門職研究において reflection の概念が注目され、専門職教育に大きな影響を与えるきっかけとなったのが Schön (1983) の文献であったことから（柳沢 2013 ほか）、Schön (1983) の *The Reflective Practitioner: How professionals Think in Action* を基本文献として選定した。また、欧米のソーシャルワークにおける reflection の入門的文献として Knott & Scragg (2013) *Reflective Practice in Social Work* を選定した。さらに、この文献における引用文献、参考文献をもとに reflection に関する文献を収集した。

(2) 日本における先行研究を概観するため、論文検索サイト CiNii を用い、教育、看護における reflection に関する論文を検索した。キーワードは「教育」「看護」のそれぞれについて「リフレクション」「省察」「反省」「反省的思考」とした。教育、看護においては reflection に関する論文数が多いことから、reflection とは何かを中心的に論じている論文を 5 件ずつ選定した。また、選定した論文における引用文献・参考文献も参照し、海外の文献については可能な限り原本を収集した。

(3) 論文検索サイト CiNii を用い、ソーシャルワークにおける reflection に関する論文を検索した。キーワードは、「ソーシャルワーク」「ソーシャルワーカー」ならびに「リフレクション」「省察」

「反省」「反省的思考」「内省」とした。重複しているものを除外したところ、最終的に 10 件が該当した。また、必要に応じてこれらの論文における引用文献・参考文献を参照した。

(4)最終的に 41 件の文献を参照し、レビューを行った。

Ⅲ. reflection とは何か

1. reflection の語義とその訳語

そもそも reflection とはどのような意味の用語なのであろうか。『スタンダード英語語源辞典(第 4 版)』によれば、reflection の語源はラテン語の“reflectere”であり、“back”を意味する“re”と、“bend”を意味する“flectere”からなる「後へ曲げる」との意味をもつ用語であるという。『ジーニアス英和辞典(第 3 版)』で reflection の意味を調べてみると、「①反射、反響、影響、反映、②映像、映った影、③熟考、熟慮、④(熟慮して得た) 考え、意見、⑤非難、小言、⑥説明、描写」などの意味がある。

『岩波哲学・思想事典』によれば、reflection はもともと光学で用いられていた用語であり、その後、哲学の世界においても用いられるようになったという。特に、経験主義の代表的論者のひとりであるロック (Locke) が心的状態に向かう経験として reflection を捉えたことにより、17 世紀頃からイギリスやフランスにおいて、現在のように「熟考する」などの思考を意味する日常的な用語として用いられるようになったとされる³⁾。

日本において reflection に関する研究が積極的に実施されている教育や看護の先行研究を概観すると⁴⁾、reflection は「内省」「反省」「省察」「振り返り」などと訳されている。主に「省察」が用いられ(秋田 1996; 柳沢 2007 ほか)、文脈に応じてその他の用語も使用されているようである。「省察」以外の訳語については、柳沢が指摘するように、「反省」では過去への指向と批判的な意味合いが強くなる可能性があること、「内省」では自身の内面のみを重視する可能性があることが考えられる(柳沢 2007: v)。また、「振り返り」は日常的にも用いる用語であるため、単なる「振り返り」のイメージが強く、reflection 本来の意味をイメージしにくいことが推察される。このような理由から、日本語訳としては「省察」が最も適切ではないかと考えられる。よって、本稿では基本的には原語のまま reflection を用い、日本語訳が必要な場合には訳語として「省察」を採用することとする。

2. reflection の起源

(1) Dewey による reflection の概念

思考を意味する reflection は、教育哲学者である Dewey が提示した“reflective thinking (省察的思考)”の概念に由来しているとされる(秋田 1996 ほか)。Dewey は『思考の方法 (How we think)』のなかで、「精神の内部に思考の問題を見だし、この問題を重視し、この問題を連続的に思考する」ことを意味する省察的な思考態度こそ我々の正しい思考態度であると述べている(Dewey = 1955: 4)。この省察的思考は単なる思考とは異なり、観念の連続的序列(consecutive ordering)、最終的な目標、探究を伴うものであり、「何らかの信念を、或ひは想定せられた知識の形式を、その信念もしくは知識の形式を支持する根拠に照らして積極的に、不憊不屈の態度で、注意ぶかく考察すること、かくの如き信念および知識の形式が更に志向する諸結論を勇敢綿密に考察すること」であると定義される(Dewey = 1955: 9)。

Dewey によれば、省察的思考は主に 5 つの側面から構成されるという。第一の側面は、suggestion (暗示) であり、具体的に行為することである。このような行為があつて初めてそこ

で何を為すべきかを考えることができる。行為をすると、何を為すべきかという観念が生じるが、それは暗示的なものであり、いくつもの暗示から何を採用するかを検討する必要が生じる。そこで、第二の側面として、intellectualization (知性的整理) が必要となる。言い換えれば、問題の設定である。問題は最初からあるわけではなく、行為者によって何が問題であるかが理解され、規定されるのである。第三の側面は、hypothesis (仮説) である。いくつもの暗示的な観念を検討することによって、仮説を設定し、その仮説をもとに詳しく観察することができる。第四の側面は、reasoning (推論) である。これは、もし、仮説として設定した観念を採用するとすれば、どのような結果が起り得るかを考えることを意味するものである。そして、第五の側面は、その推論が実際にどうであるかを確認するための testing the hypothesis by action (行動による仮説の検証) である。省察的思考にはこれらの5つの側面が必要であるが、これらの側面の順序は決して固定的なものではないという (Dewey = 1955 : 109-124)。

また、Dewey は経験と思考との関連性について、経験には試行錯誤的なものと reflective なものとの2つがあるとし、「なんらかの思考の要素がなければ、意味をもつ経験は可能ではない。」と述べている (Dewey = 2000 : 195)。そして、思考とは「われわれがする何かと生じた結果の間の特別な関連を発見して、両者が継続的になるようにする意図的な努力」であるとともに、「われわれの経験における知的要因を明確にすること」であり、「目的に向かって行動することを可能にする」ものであると指摘している (Dewey = 2000 : 196)。

以上のことから、Dewey は、思考という営みを「ある状況とその結果との関連性を考えるための探究の過程」として捉えていると言うことができるだろう。

(2) Schön による reflection の概念

(2)- 1 reflection-on-action

実践を行った後にその実践を対象化し、その実践における意味を考えることを Schön は reflection-on-action (行為についての省察) と呼んでいる (Schön = 2001 : 105)。これは、いわゆる「ふり返し」のことであると考えられる。実践のふり返しは、ソーシャルワークをはじめ様々な領域において、専門家養成のための教育や研修の重要な要素として取り入れられている。このような自身の実践のふり返しによって、自分に不足している事柄への気づきはもちろん、援助者としての自身の可能性を見出すことができる (孫 2012 : 201)。より具体的に言えば、実践後にふり返ることで、実践の最中には意識しなかった視点や解決方法、実践における自分自身の傾向などに気づき、それらの気づきを次の実践に活かすことができるのではないかと考えられる。そうすることで、より質の高い実践を展開することができるだろう。

このような実践の後に行う reflection が重視されるようになった背景のひとつには、「『実践』そのものの価値が見直され、実践 (経験) からしか学ぶことのできない知識の存在が認識され始めた」ことがある (本田 2001 : 57)。それゆえ、実践によって得られたものを明確にするためにも行為の後に自身の実践について考える reflection が求められるのであろう。

(2)- 2 reflection-in-action

一般に、対人援助専門職による実践は型にはまったものではなく、ケースによって柔軟な対応を求められる。そのため、実践者には、今まで出会ったことのない状況に対応するための枠組みの転換、問題の設定、その問題を解決するための戦略をたてるための営みが求められる。Schön はこのような行いを reflective conversation with the situation (状況との省察的対話) と呼んでいる (Schön = 2007 : 147-152)。実践家はこのような状況との対話を通して実践を展開してい

くことになるが、その鍵概念となるのが reflection-in-action（行為の中の省察）である。

reflection-in-action とは、実践における様々な状況を認識し、そのことの意味を行為しながら考えるプロセスのことである（Schön = 2001 : 120）。Schön によれば、このような「行為の中の省察（reflection in action）というプロセス全体が、実践者が状況のもつ不確実性や不安定さ、独自性、状況における価値観の葛藤に対応する際に用いる〈わざ〉の中心部分を占めている。」という（Schön = 2007 : 51）。つまり、Schön は、専門家がどのように状況を理解し、いかなる解決方法を選択するかといった一連の思考や判断を専門家の専門性として重視しているのである。

専門家が新たに出会う状況を認識し、その問題を規定し、解決策を考える場合、専門家は理論だけでなく、過去の実践とも照らし合わせを行っていることが考えられる。Schön によれば、我々の行為のなかには、実践者自身も意識していないような行為や認識、判断などが含まれており、専門家はそのような暗黙の knowing-in-action（行為の中の知）に依るところが大きいという（Schön = 2001 : 79-87）。このような行為の中の知は、意識的に認識しようとしなければ見過ごされてしまうと考えられる。それゆえ、様々な領域において専門家の専門性を明らかにするために reflection-in-action が重視されているのではないだろうか。

3. reflection の定義

(1) 看護における reflection

教育の先行研究においては、Dewey や Schön の reflection の概念をもとに研究が進められていることが多い。では、教育と並んで reflection の研究が積極的に行われている看護の領域では、reflection はどのように定義されているのであろうか。

わが国の看護領域の先行研究を概観すると、Dewey や Schön のほかに、Boyd らや Reid の定義がよく引用されている（中田ら 2003; 田村ら 2008 ほか）。Boyd らによれば、reflection とは「自己の経験を意味づけ、明確化するプロセスであり、そのプロセスによって視点の転換をもたらすものである」という（Boyd & Fales 1983 : 101）。また、Reid は reflection を「実践を記述し、分析し、評価するために、そして、実践についての学習の情報を得るために、実践を繰り返すプロセスである」と定義している（Reid 1993 : 305）。さらに、田村らは海外の先行研究をもとに、reflection とは「意図的なものであり、実践的な振り返りのプロセスである」と述べている（田村ら 2008 : 173）。

これらの定義から、reflection とは単に自身の実践を繰り返すことではなく、自らの実践を意図的に繰り返すことで、実践の意味づけを行い、それらの営みをとおして得られた知見を次の実践に活かしていくものであると捉えることができるだろう。

(2) ソーシャルワークにおける reflection

わが国のソーシャルワークでは、渡部が reflection の要素を取り入れた「気づきの事例検討会」を提唱しているものの（渡部 2007）、これまであまり reflection という概念が注目されることはなかった。しかし、欧米では reflection の重要性が指摘され、すでに教育にも取り入れられており、Parker は、「20 世紀後半を通してソーシャルワーク教育にしっかりとめ込まれ、また、専門職訓練の中での成人学習（adult learning）の中心となってきた。」とも述べている（Parker = 2010 : 43）。このように、近年ソーシャルワークにおいても注目されつつあるが、reflection の概念がソーシャルワークに取り入れられたのは決して最近のことではない。1950 年代にはすでに Perlman が Dewey の reflective thinking の考え方を取り入れ、問題解決アプローチを提示して

いる (Perlman 1957)。

Trevithick によれば reflection とは「より良い実践のために、実践において適用しているアプローチについて吟味したり、批判的に考えたりすること」であるという (Trevithick 2012: 98)。このような reflection を行うことによって、知識や理解はもとより、行為の型、実践プロセスに対する批判的な見解、判断についての不確かさ、感情など様々なことが明らかになるとされる (Knott 2013: 5)。

日本においては reflection について検討している研究はほとんど見当たらないが⁵⁾、南は教育や看護における先行研究をもとに、reflection の概念について整理している。南によれば、reflection とは「何らかの体験に基づいたところの問題状況の理解と、問題状況への対応の仕方に関しての自己理解の両者を含むプロセス」であるという (南 2007: 6)。

以上のことから、reflection とは、ソーシャルワークにおいて実践者や学生の気づきを促すためにこれまで行われてきた事例検討会やスーパービジョンと相対する概念ではないことがわかるだろう。自身の実践をふり返ることによって、その状況がいかなるものであったかということに気づくとともに、自己覚知を行うという点ではこれまでのふり返りと何ら変わらない。その意味で、reflection は新しい概念というよりは、むしろ、これまで無自覚的、非構造的に行われてきた気づきを得るための営みを意識的に行うための、ある一定の枠組みを提示するものであると考えられる。そのため、スーパーバイザーや管理者などスーパービジョンを行う立場にある人々は、reflection のためのより良い環境をつくる必要がある (Knott 2013: 14)。

一方で、これまでのふり返りとは異なる点もある。それは、これまでのように、実践が終わった後にのみ自身の実践をふり返るのではなく、実践を行っている最中に意図的に自身の実践について考えるものでもあるという点である。もちろん、実践が終わった後にふり返ることは意味のあることであるが、いくらふり返ってもその実践自体が変わるわけではなく、次の実践に活かすことしかできない。その点、行為をしながらその時々自身の認識を意識的に問うことは、その実践をよりよいものへと変化させる可能性がある。

このように、reflection とは、よりよい実践のために実践後はもとより、実践中にも意図的に自身の実践についてふり返る営みであると言えることができるであろう。

IV. reflection (省察) の関連概念の整理

ここまで reflection の定義を見てきたが、reflection とは何かをより明確にするためには、関連概念についても整理しておく必要があるだろう。reflection の関連概念として、Trevithick は“reflective practice”, “critical reflection”, “reflexivity” の3つをあげている (Trevithick 2012: 97)。また、Knott は、“critical thinking” と reflection との関連性についても言及している (Knott 2013: 11-12)。そこで、ここでは、reflective practice, critical reflection, reflexivity, critical thinking について見ていくことにしたい。

reflective practice (省察的実践) は、「保健や教育、ソーシャルワークにおいて、よりよい実践を行うための方法として用いられることが増えてきた概念」であり (Mishna & Bogo 2007: 531)、具体的には、実証主義を基盤とした実践の捉え方に対抗するものである。Ruch のことばを借りれば「人間の行動を理解するために、直観や暗黙知、芸術性などを理論や実証研究と同じように認めるもの」であり (Ruch 2005:116)、これまで見過ごされてきた実践者のアートの部分に焦点をあてるものであると考えられる。

しかし、reflection は決して個人の内面のみに向けられるものではなく、社会的で政治的なブ

ロセスでもある。それゆえ、ソーシャルワーカーがソーシャルワーカーであるために、reflective practitionerとしてのソーシャルワーカーは社会的な側面に関する reflection を行うことも求められるという (Knott 2013: 11)。

では次に、critical reflection について考えてみることにしたい。critical reflection (批判的省察) とは「批判的分析や経験の評価、新たな理解を見出すことを含む考える活動」のことである (Rutter & Brown 2012: 29-30)。これは、「実践や経験を分析するアプローチであり、実践や経験に埋め込まれている前提を明確化することに基づくもの」であり、Schön の reflective practitioner 論から生じた概念である (Fook 2004: 16)。Schön に由来するものであるという点では reflection とほぼ同義であるように思われるが、critical reflection はクリティカル・ソーシャルワークと共通性があり、reflection とは区別される (Fook 2004: 58)。教育の領域で reflection の研究を行う秋田によれば、critical reflection は自身の置かれている文脈やそこに基底するイデオロギー等に気づくためのものであり、前述した Schön の概念にはこのようなレベルでの reflection は含まれていないという (秋田 1996: 459-460)。

これらのことから、critical reflection は単なる reflection ではなく、reflection をとおして得られた認識自体の確からしさを問うという意味が含まれている概念であると理解することができる。

critical thinking は、近年、様々な領域において注目されているが、日本語では、「批判的思考」と訳されることが多い (隅広 2010:43)。Fisher によれば、critical thinking は「一種の評価に対する思考である。それは批評と創造的思考の両方を含み、特に信念または行動を裏づけるために示される推論や議論の質に関わる。」ものであり、「観察、コミュニケーション、他の情報源の解釈と評価を必要とする。」という (Fisher=2005: 18-19)。また、critical thinking には、「自身の主張や論拠について明確に記述すること、批判的に評価すること、新たな見方を考えること、また、結果だけでなく、推論 (我々はどのように考えるか) に注意を払うことも含んでいる」とされる (Gambrill 2013: 95-96)。

critical thinking の起源は、Dewey の reflective thinking にある (Fisher=2005: 4-5)。前述したように、reflection も Dewey の reflective thinking に由来していることから、この意味では、reflection と critical thinking とは類似の概念であると考えることができる。このことに関して、Brookfield は、critical thinking には reflective な特性が含まれていると述べている (Brookfield 1987)。また、津田らは両者の関係について、reflection は「実践から構築される学びを基にした思考活動」であるのに対して、critical thinking は「リフレクティブサイクルあるいはリフレクティブな過程のなかの、批判的分析の局面で行う主要な思考活動」であり、「科学的な判断のための学問的なエビデンスを追求する実践的思考活動」であるという点で両者は異なると整理している (津田ら 2006:1695)。

最後は reflexivity (省察性) である。reflexivity は、実践者の態度がどのような影響を受けるかを明らかにすることを意味するという。また、Trevithick は Sheppard の「reflexivity は、ソーシャルワーカーに積極的に思考することを求める。また、アセスメントし、対応し、積極的に行動を起こすこと、自身の実践における関心のある状況において実際に参加する人であることを求めるものである」との記述を引用し、ソーシャルワーカーにとって省察性の姿勢が重要であることを説明している (Trevithick 2012:98-99)。つまり、reflexivity とは、「各自の立ち位置を鋭く問いなおすことでもある」といえる (隅広 2010:53)。

以上のことから、reflection とは経験から導き出される知の体系を重視し、それらを意識化し、分析・評価することを求めるものであるといえる。その際、自身の実践において根拠としている

価値や知識すらも常に疑い、その根拠の正当性を問うことを求める critical thinking の要素を取り入れたものが critical reflection であると整理することができる。このような実践を行うために、実践者には reflexivity の姿勢が求められるのであろう。

V. 考察

これまで見てきたように、reflection の概念自体は決して新しいものではない。自身の実践について考えるということは、ソーシャルワークはもちろん、様々な領域において、スーパービジョンや事例検討、研修などをおしてこれまでも行われてきており、それらの重要性については社会的にも認められているところである。このようななかで、近年 reflection の概念が注目されているのは、Schön らによって reflection-in-action の考え方が導入され、その重要性が指摘されたからであると考えられる。

実証主義を重んじる専門家モデルをもとにした専門職論のもとでは、専門職の専門職化の過程において経験や勘に頼る実践から脱却することが目指されてきた。しかし、Dewey や Schön の考えに従えば、これまで言語化されてこなかった実践者の経験や勘によって蓄積された知の中にこそ、専門職の専門性が隠されているということになる。したがって、ソーシャルワークが専門職としてのアカウンタビリティを果たすためには、ソーシャルワーカーがこれらの知に自覚的になる必要があり、そのために reflection という営みは必要不可欠なものであると考えられる。ソーシャルワークが専門職であることを社会に示そうとしている今日だからこそ、改めて専門家とは何かを問い直し、ソーシャルワーカーの行動ではなく、reflection をとおして得られたソーシャルワーカーの思考や判断からソーシャルワークとは何かを導き出すような試みが求められているのではないだろうか。

VII. おわりに

本稿において、reflection は専門職としてのソーシャルワークにおいても重要な概念であることが確認できた。ソーシャルワーカーは一つとして同じものはないクライアントの状況と常に向き合い、理論や様々な経験等と照らし合わせながらその時々で「考える」ことが求められる。このようなリアルタイムに考えていく行為こそ専門職としての行為であり、そこでの一つひとつの判断に専門職らしさが凝集されているのではないかと考えられる。

今回は reflection の概念を明らかにすることはできたが、レビューの範囲が限られていることから、今後は先行研究の範囲を拡大し、継続して reflection の概念についての理解を深めていく必要があると思われる。また、reflection とは何かということにしか触れることができず、どのように reflection を行うかといった具体的な方法や reflection に必要なスキルなどについて明らかにすることはできていないことから、今後はこれらの点についても理解を深める必要があると考える。

注

- 1) 近代における専門家の活動は「科学的な理論や技術を厳密に適用する道具的な問題解決にある」とされ、専門家は“technical expert (技術的熟達者)”と捉えられてきた。(Schön=2001:19)。しかし、このような認識のもとでは、「専門家の実践は問題の『解決』(solving) の過程」であると捉えられ、「問題の『設定』(setting) は無視されている」という (Schön=2001:56)。

このような問題意識から「技術的熟達者」に代わる新たな専門家モデルとして reflective practitioner の概念が提案された。

- 2) 実践のふり返りのための機会としてスーパービジョンが位置づけられ、自己の価値観や感情などに気づき、専門職的自己 (professional self) を形成していくことが求められている。
- 3) 『岩波哲学・思想事典』によれば、ロックは、観念 (idea) を外界に向かう経験である「感覚 (sensation)」と心的状態に向かう経験である「反省 (reflection)」とに区別し、次第に反省が内観 (introspection) の方法として効力を発揮するようになったことで、“reflection” が一般的な用語としても定着したという。
- 4) 文献検索サイト CiNii において、「教育」「省察」では 790 件、「教育」「反省」では 1846 件、「教育」「リフレクション」では 473 件がヒットした。また、「看護」「省察」では 78 件、「看護」「反省」では 81 件、「看護」「リフレクション」では 217 件がヒットした。
- 5) 文献検索サイト CiNii における検索では「ソーシャルワーク」「省察」では 5 件、「ソーシャルワーク」「反省」では 4 件、「ソーシャルワーク」「リフレクション」では 0 件であった。

文献

- 秋田喜代美 (1996) 「教師教育における『省察』概念の展開—反省的实践家を育てる教師教育をめぐって」『教育学年報』 5、451-467。
- Boyd, Evelyn M and Fales, Ann W (1983) Reflective Learning: Key to Learning from Experience, *Journal of Humanistic psychology*, 23 (2), 99-117.
- Brookfield, S (1987) *Developing critical thinkers*, Milton Keynes : Open University Press.
- Dewey, J (1916) *Democracy and Education : An Introduction to the Philosophy of Education*, New York : Free Press. (= 2000, 河村望訳『民主主義と教育』人間の科学新社。)
- Dewey, J (1933) *How We Think : a restatement of the relation of reflective thinking to the educative process*, Chicago: Henry Regnary Co. (=1955, 植田清次訳『思考の方法』春秋社。)
- Fisher, Alec (2001) *Critical Thinking : An Introduction*, Cambridge University Press. (= 2005, 岩崎豪人・品川哲彦・浜岡剛・ほか訳『クリティカル・シンキング入門』ナカニシヤ出版。)
- Fook, J (2004) *Critical Reflection and Transformative Possibilities*, Davies, Linda and Leonard Peter ed. *Social Work in a Corporate Era: Practice of Power and Resistance*, Ashgate Publishing Limited, 16-30.
- Fook, J (2004) *Critical Reflection and Organizational Learning and Change : A Case Study*, Gould, N & Baldwin, M ed. *Social Work, Critical Reflection and the Learning Organization*, Ashgate, 57-73.
- Gambrill, Eileen (2013) *Social Work Practice: A Critical Thinker's Guide* 3rd Ed, Oxford University Press.
- 本田多美枝 (2001) 「看護における『リフレクション (reflection)』に関する文献的考察」『Quality Nursing』 7 (10)、53-59。
- 岩田幸枝・國清恭子・千明政好ほか (2005) 「異常を判断した ICU 看護師の思考パターンの分析」『群馬保健学紀要』 26、11-18。
- Knott, C. and Scragg, T (2013) *Reflective Practice in Social Work* 3rd Ed, Sage.
- 空閑浩人 (2012) 『ソーシャルワーカー論—かわり続ける専門職のアイデンティティ』ミネルヴァ書房。
- 南彩子 (2007) 「ソーシャルワークにおける省察および省察学習について」『天理大学社会福祉学

- 研究室紀要』9、3-16。
- Mishna, Faye and Bogo, Marion (2007) Reflective practice in contemporary social work classroom, *Journal of Social Work Education*, 43 (3), 529-541。
- 中田康夫・田村由美・石川雄一ほか (2003) 「看護におけるリフレクションと Evidence-Based Nursing」『*Quality Nursing*』9 (1)、57-62。
- 大谷京子 (2012) 『ソーシャルワーク関係—ソーシャルワーカーと精神障害当事者』相川書房。
- Parker, J (2010) *Effective Practice Learning in Social Work 2nd Ed*, Learning Matters。(=2012、村上信・熊谷忠和訳『これからのソーシャルワーク実習—リフレクティブ・ラーニングのまなざしから』晃洋書房。)
- Perlman, Helen (1957) *Social Casework: A Problem-solving Process*, The University of Chicago Press。(=1967、松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク—問題解決の過程』全国社会福祉協議会。)
- Polanyi, Michael (1966) *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul Ltd。(=1980、佐藤敬三訳『暗黙知の次元—言語から非言語へ』紀伊國屋書店。)
- Reid, Brigid (1993) 'But we're doing it already!' Exploring a response to the concept of Reflective Practice in order to improve its facilitation, *Nurse Education Today*, 13, 305-309.
- Ruch, Gillian (2005) Relationship-based practice and reflective practice: holistic approaches to contemporary child care social work, *Child and Family Social Work*, 10, 111-123.
- Rutter, Lynne and Brown, Keith (2012) *Critical Thinking and Professional Judgement for Social Work 3rd Ed*, London: Sage.
- 齋藤征人 (2008) 「精神保健福祉実践者の『実践知』形成過程に関する実証研究」『帯广大谷短期大学紀要』45、1-10。
- 齋藤征人 (2010) 「社会福祉士の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『帯广大谷短期大学紀要』47、31-44。
- 齋藤征人 (2011) 「高齢者福祉実践者の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『帯广大谷短期大学紀要』48、55-68。
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1990) 「教師の実践的思考に関する研究(1)—熟練教師と初認教師のモニタリングの比較を中心に」『東京大学教育学部紀要』30、177-198。
- 佐藤学・秋田喜代美・岩川直樹ほか (1991) 「教師の実践的思考に関する研究(2)—思考過程の質的検討を中心に」『東京大学教育学部紀要』31、183-200。
- Schön, Donald A (1983) *The Reflective Practitioner: How professional Think in Action*, Basic Books。(=2001、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版、=2007、柳沢昌一・三輪健二監訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房。)
- 孫希叔 (2012) 「『状況との対話』を可能にする専門性と実践力」空閑浩人『ソーシャルワーカー論—かかわり続ける専門職のアイデンティティ』ミネルヴァ書房。
- 隅広静子 (2010) 「クリティカル・ソーシャルワークにおける『クリティカル』概念の整理の試み—ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために」『福井県立大学論集』34、43-55。
- 田村由美・藤原由佳・中田康夫ほか (2002) 「リフレクションを行うために必要なスキル開発—オックスフォード・ブルックス大学における教授方法実践例」『*Quality Nursing*』8 (5)、51-57。
- 田村由美・中田康夫・平野由美ほか (2003) 「実践的思考能力としてのリフレクション能力育成

- のための指導の実際—リフレクティブジャーナルを活用して」『看護教育』44（6）、452-456。
- 田村由美・津田紀子（2008）「リフレクションとは何か—その基本的概念と看護・看護研究における意義」『看護研究』41（3）、171-181。
- Trevithick, Pamela (2012) *Social Work Skills and Knowledge: A Practice Handbook*, 3rd Ed, Open University Press.
- 渡部律子（2007）『基礎から学ぶ 気づきの事例検討会—スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる』中央法規。
- 山口美和・山口恒夫（2004）「教師の自己リフレクションの一方法としてのプロセスレコード—看護教育および看護理論との関連から」『信州大学教育学部紀要』112、133-144。
- 山口美和・越智康詞・山口恒夫（2006）「教師教育におけるリフレクション方法の検討—『プロセスレコード』による事例の振り返りを通して」『信州大学教育学部紀要』119、79-90。
- 柳沢昌一（2013）「省察的实践と組織学習」『教師教育研究』6、329-352。
- 山田淳子・佐藤由美（2008）「個別支援から事業化提案決定に至るまでの産業看護職の思考過程」『千葉看会誌』14(1)、8-16。
- 横山登志子（2008）『ソーシャルワーク感覚』弘文堂。